
フミさんと衝撃発言

青居ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フミさんと衝撃発言

【Nコード】

N2822U

【作者名】

青居ハル

【あらすじ】

医薬品会社の開発研究員をしている春元フミは今日も研究に没頭してしまふ仕事ぶり。

その日、研究室に設置されているテレビからは注目されているサッカーの試合が放送されていた。

「タツミ選手、最後にこの喜びは誰に一番伝えたいですか？」

そんなサッカーの試合終了後に行われたインタビューに選手が答えた発言は……

一応連載としてますが基本は読みきり。更新速度ものんびりです。

フミさんと衝撃発言

某医薬品会社の開発研究員をしている春元フミは研究に没頭し始めると2・3日は軽く会社にお泊・徹夜コースを平気でしてしまうような人物であった。

「春元さんって1人暮らしなの？」

普段から自身のことについては多くを語らないフミは以前そんなことを尋ねられたことがあった。

その時の彼女の答えは「NO」だった。

「家族と住んですよ」

「あ、そうなんだ。でも会社に泊まり詰めで親御さんとか心配しない？」

「さあ？」

そこで会話は終了。彼女は再び研究に没頭し始めた。それ以後、フミの社内での評価は「仕事はできるが面白味のない奴」と言ったところである。

そんな彼女だからこそ、世間の流行なるものにも全くと言っていいほど関心を持たないのも無理は無い。

例え、研究所の一角にあるテレビでワールドカップの中継が放送していようが。

例え、フミ以外の研究員がそのテレビの前で試合にクギ付けになっ
ていようが。

例え、テレビ画面で試合の後半3分前に逆転ゴールが劇的に決まっ

ていようが。

フミはお構いなしに研究に没頭する。

「主任、レポートが書けたのでチェックをお願いします」

「あー……お、今日のインタビューはタツミか！」

フミの言葉に曖昧に頷きながら（きつと聞こえてはいないのであろう）主任はテレビ画面に夢中である。

画面では主任が言ったタツミ選手が嬉しそうにインタビューに答えている。

「そりゃーそうでしょう。今日の試合が勝てたのもタツミあってこそですよ！」

「確かに、最後の逆転ゴールは良かったなあ」

予選とはいえ世界への第一歩を決めた興奮は冷めることなく研究員達は口々にタツミ選手を褒め称えている。

『タツミ選手、最後にこの喜びは誰に一番伝えたいですか？』

『え……そうですね……』

女性レポーターの質問に尋ねられたタツミ選手は困惑したように言葉を濁す。

「うわぁーベタな質問しましたね、このレポーター」

「えーでも女性としては気になりますよ！ここで恋人とか言われたらショックですよ！！」

「タツミって女に人気あるもんなあ……抱かれない男ナンバー1だっけ？」

「違いますよ。抱かれない男ナンバー5。でもスポーツ選手では1番ですよ」

「よく知ってるねえ」

「ファンですから!!」

「でもこういう時は『応援してくれたファンの皆に』とかでしょ？」

などとタツミ選手の回答を先読みする面々の会話を聞き流しつつ、フミはパソコンと向かい合っていた。

時刻は5時27分。就業時間まであと3分だ。

どうやら今日は会社に泊まることなく定時に帰るらしい彼女はパソコンの電源を落とし始めている。

『ここは応援してくれた皆にと言いたいのですが、今日は妻に』

タツミ選手のその発言にレポーターも、テレビで見ていた研究員達も呆氣に取られている。

それはそうだろう。

既婚者ならば当然の発言だが、今までそんな噂など一つもなかった今をときめく若手サッカー選手が恋人を一足飛びしての妻発言だ。しかしそんな周囲の反応などお構いなしにタツミ選手は言葉を続ける。

『偶然にも今日は妻との結婚記念日ですし、いつも合宿や海外遠征で一緒に居られない分、この喜びを分かち合いたいです』

『そ、そうですね・・・素敵な結婚記念日になりましたね』

『ええ。妻にいいプレゼントを持って帰ることができてホッとしています』

これで明日の見出しはサッカーの結果にしろ、衝撃発言にしろ、一面はタツミ選手で決まりだろう。

「いやああっ！！タツミが結婚してたなんて~~~~っ！！」

「驚いたな」

「ホントに。今までそんな噂なかったですね？」

「きつとデタラメですよ！でっち上げですよっ！！」

次々に声上がる中、終業を告げるサイレンが響き渡った。
と同時に帰り支度を済ませたフミが席を立つ。

「お先に失礼します」

テレビの前に集まる同僚達に挨拶をするなり、足早に研究所を去る
うとした。

「あれ？春元さん今日はもうアガリ？」

同僚の一声は単なる興味本位だった。

仕事一筋のフミが定時に帰るなど滅多に無いので好奇心が働いたの
だ。

「はい。今日はご馳走を作らないといけないので」

「ご馳走？」

「ええ、だって……………」

言葉少なめに彼女はテレビを指差した。画面ではちょうどレポーター
がインタビューの終わりを告げている最中だった。

「春元タツミ選手、今日はお疲れ様でした。次に……………」

インタビューが終わると画面では先程の試合のリプレイが流れ始め

たが、さっきまでテレビに釘付けだった一同はその視線を同僚へと向けていた。

「結婚記念日と同時に試合の勝利祝もしないといけないので」

「では」と研究所を出て行ったフミに残された研究者一同はまるで狐に化かされたかのように呆然と彼女を見送った後、揃って驚きの声を上げるのだった。

タツミさんの惚気発言

「全国ネットであんな事を言うな！」

試合後、スポーツ記者に囲まれて言ってしまった発言について監督に怒られた。

春元タツミ自身としては別におかしな事を言っただけは全く無い。何せ家族に向けての言葉なのだ。何がおかしいのかサッパリ判らず首を傾げていると、監督は「処置なし」といった感じで諦めモードで首を振った。

「俺はお前が既婚者だって知らなかったぞ」

「あれ？そーですか？？でも指輪だつてしてますよ」

ホラッとタツミは首からさげているプラチナの指輪を見せた。

「~~~~~そんなのはお洒落か何かだと思うだろう！結婚指輪なら指にしろっ！」

「昔はしてたんですけど、無くしちゃいそうなんで止めました。フミさんもそっちの方が安心だつて言いますし」

フミさんと言うのがタツミの愛しい奥様だ。

そう言えば今日は腕を揮ってご飯を作ると言っていた事を思い出す。

これは怒られている場合ではなかった。急がねばならない。

「監督、そろそろ帰ってもいいですか？」

「お前には反省と言う言葉はないのか！？」

「いえ。ただこの件に関しては特に反省するべき点が見当たらない

だけです」

「あるだろう！あの衝撃発言だっ！！」

「はぁ……」

「明日にはスポーツ紙やテレビの餌食なんだぞ！」

「今更なんですけどね」

餌食は嫌だなあと顔を顰めるタツミに監督は尋ね聞く。

「大体、一体いつの間に結婚なんてしたんだ？普通はチームに一言言うべきだろうに……」

ブツブツ言う監督の言葉にタツミは「ああ」と声を上げた。

「もしかして俺の結婚って最近だと思われてます？」

「当たり前だろう。お前今何歳だ」

「24ですけど、結婚は21ですよ」

「21っ！？でもお前、確かその頃ドイツじゃないのか！！？」

タツミはずっとドイツのチームでプレイをしており、日本のチームに移籍したのはつい1年前の事だ。

「ええ、だからドイツで新婚生活満喫してました。あ、今もですけど」

「……相手はドイツ人なのか？」

「いえ、日本人ですよ。幼馴染って奴です」

「もっと言えば俺の初恋の人ですよ」と顔をにやかせるタツミに監督は頭痛が酷くなる。

しかし、コレで自分達が彼の結婚を知らなかった事にも納得した。

21と言う年齢には驚いたが、その頃ならばタツミはまだ無名でし

かも外国暮らしだ。日本にいる輩が知るはずも無い。

「で、もう帰ってもいいですか？フミさんが料理作って待ってるんで」

「あー……もういい。サツサと帰って奥さんの手料理を満喫しろ」

これ以上惚気話に付き合うのはバカらしいので追い払うように手を振ると、タツミは「違いますよ」といった。

「満喫できるわけ無いじゃないですか。俺はコレからフミさんの手料理を阻止しないといけないんですよ」

「なんだそりゃ」

「フミさん張り切ると余計なものをアレンジして、コレが微妙なんですよ」

「……味オンチなのか？」

「いえ、普通はメチャクチャ上手いですよ。ただ張り切ると微妙」

この前、ソレまでの経験を生かして無難な「カレー」をリクエストしておいたんですけど、それが微妙に甘くて。

何をいれたのか聞いたら、チョコレートなんですよ。まあ隠し味にいれるって聞くしそれ自体は良かったんですけど、入れた量が半端無くて。

すっぱーマズイとか言うなら、こっちも文句言えるんですけど、あの微妙なラインで文句を言ったらフミさん逆切れしそうだし、いや、怒った顔も可愛いんですけどね。

やっぱり奥さんとは仲良く過ごしたいじゃないですか。遠征から戻ってきて久しぶりの二人っきりの夜ですよ？

フミさんの機嫌を損ねたら、夜は別々の部屋なんですよ？

生殺じじゃないですか！そんなん我慢できるわけがないじゃないで

すか！唯でさえフミさんは可愛いのに、あの時のフミさんはまた格別なんですよ！！

「・・・・・・・・タツミ、お前早く帰れ」

永遠と続くのではないかと思われる惚気話について観念した監督の言葉にタツミは晴れやかな笑顔で頷いた。

「じゃあ監督、お先に失礼します」

忙しく扉を閉めて立ち去るタツミの様子に監督は「どうして今まで気がつかなかったんだろう？」と逆にそっちの方が不思議に思っていた。

タツミさんの惚気発言（後書き）

とりあえず一旦完結。

コメディイと言つ事で第三者のな物語でお送りしました。
少しでも楽しんでもらえたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2822u/>

フミさんと衝撃発言

2011年9月5日15時59分発行